

ドイツ語圏スイスにおける言語状況： 標準変種の規範化と方言の拡大

The Language Situation in German-speaking Switzerland — Codification of the Standard Variety and extending Use of Dialects

高橋 秀 彰
TAKAHASHI Hideaki

In German-speaking Switzerland, its standard variety of the German language is principally used as a written language, and dialects of each region are made use of in conversation of any situation and formality, which is characterized as diglossia. A new tendency is, however, to be observed that the Swiss German standard variety is being codified more than ever and dialects are more often used also in those situations where the standard variety has been used. This article reviews whether this diglossia is being undermined and which varieties of German can function as identity markers in Switzerland.

キーワード

ダイグロシア (diglossia)、標準変種 (standard variety)、変異形 (variante)、複数中心地言語 (pluricentric language)

1. 序

スイス連邦には、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レトロマンシュ語の4つの国語 (Landessprache) があるが、連邦レベルで使用される公用語 (Amtssprache) はドイツ語、フランス語、イタリア語の3言語であることが、それぞれスイス連邦憲法第4条と第70条第1項で規定されている。公用語の選択は第4条第2項により各州に委ねられており、本稿で取り上げるドイツ語圏は全体の6割以上を占めている。ドイツ語圏では次節で考察する「ダイグロシア」(diglossia) の状況が存在し、憲法で定められているドイツ語は、事実上公的機関で使用されるH変種 (high variety) を指していると解釈される。一方、会話では主に各地の方言が用いられており、L変種 (low variety) と呼ばれている。しかし、H変種とL変種との使い分

けは複雑で、同じドイツ語圏であるドイツやオーストリアでは考えられないさまざまな問題を抱えている。ダイグロシアが存続することにより、スイス¹⁾の独自性が守られている一方、標準変種の確立と位置づけが十分できていないという状況もある。本稿では、スイス・ドイツ語圏におけるダイグロシアの理論的背景と現況を概観し、態度研究の成果を踏まえて、複数中心地言語としてのドイツ語との関連を考察することを目的とする。

2. ダイグロシア

複数の変種が並存する「ことば共同体」²⁾ (speech community) は多数あるが、同一のことば共同体内で2つの変種が機能により明確に使い分けられるケースは限られている。このような特殊な言語状況を Charles A. Ferguson (1996)³⁾ はダイグロシアと名づけ、アラビア語、現代ギリシア語、ハイチ・クレオール語、スイスドイツ語の4つの言語地域の分析により理論的基盤を構築している。Fergusonはダイグロシアを学術的に影響ある形で普及させた最初の学者として位置づけられ⁴⁾、彼が提唱した「古典的ダイグロシア」はその後の研究の礎になっている。ここではまず、Fergusonが提供する9つの枠組みを振り返りたい。

ダイグロシアでは、2つの変種間に連続体が存在せず、言語体系が明確に異なる2つの変種が並存している。これらの変種はそれぞれH変種(上位変種、high variety)とL変種(下位変種、low variety)と呼ばれ、それぞれの変種が場面や機能により明確に使い分けられて、使用領域の重複が極めて少ないという特徴がある (ibid.: 27 f.)。一例としてFergusonはスイスドイツ語圏での標準ドイツ語(H変種)とスイスドイツ語(L変種)の例を挙げている。これに対して、例えばドイツでは、標準ドイツ語と地域方言の間には日常語(Umgangssprache)と呼ばれる連続体が存在して両者を結んでおり、日常会話では方言を使用する話者も、公式な会話では標準変種への収束が見られるなど大きな違いがある。従って、標準語と方言が共存する多くのことば共同体の言語状況をダイグロシアと呼ぶことはできない。

Fergusonによれば、変種の威信(prestige)にも差があって、H変種の方がL変種より威信があり優れていると話者がみなしているという (ibid.: 29)。伝統的に多くの文学作品がH変種で書かれるということも、H変種が持つと言われる威信に影響しているのだろう。また、L変種は日常会話を通じて母語として獲得されるが、H変種は学校教育を通じて習得されるため、模倣すべき規則として学ばれるH変種の文法には心理的距離感が生まれてくる (ibid.: 30)。しかし、このような威信は、H変種の習得が一部のエリートに限られている場合に発生しうるので、誰もが義務教育を通じてH変種の習得が求められるスイスには当てはまらない。スイスでは、H変種とL変種の間には優劣関係は存在しないばかりか、L変種は互いの連帯感の醸成に寄与していて、劣った変種と見なされることは決してない。

このように2変種が並存するダイグロシアは、安定していて少なくとも数世紀以上続くとさ

れている (ibid.: 31)。Fergusonによると、当該言語の中間的な形式 (intermediate forms of the language) とH変種からL変種への借用語が、2変種の緊張関係のバランスをとるのに役立っているという。中間的な形式としてギリシア語 (mikti)、ハイチ語 (créole de salon)、アラビア語 (al-lugah al-wusta) の例が挙げられているが、スイスの例は紹介されていない。

H変種とL変種の最も顕著な相違として文法が挙げられており、標準ドイツ語では4つの名詞格と2つの非迂言的直説法があるのに対し、スイスドイツ語には3つの名詞格と1つの非迂言的直説法しかない指摘されている。また語彙レベルでは、H変種が包括的な専門用語や学術語を多く含み、L変種は家庭に関わる語や地方に密着した語を多く含むとされ、音韻についてはH変種はL変種を基盤とする構造を持っている (ibid.: 33)。

H変種とL変種の2変種から構築されるFergusonのダイグロシア理論は、その後Gumperzが機能により使い分けられるあらゆる種類の変種にまで拡大したのを受けて、Fishman (1970: 73 ff.) が異なる言語間の使い分けにまで拡大するなど修正案が出されてきた。しかし、機能により使い分けられる変種や言語を全てダイグロシアに含めると、ほとんどのことば共同体がダイグロシアに含まれてしまい、Fergusonが想定した限定的な言語状況の特殊性が表現できなくなってしまう。変種間の距離が別の言語になるほど遠くなく、スタイルの違いのように近すぎない、適度の距離⁵⁾を前提とした2変種の使い分けをダイグロシアの条件にするのが妥当と考えられる。

Fergusonの理論的枠組みはスイスの言語状況に必ずしも適合しない部分があることから、ダイグロシアに限定的な意味を付与する術語が提案されてきた。話しことばと書きことばで使い分けるという典型的な特徴に注目する研究者からは、「媒体手段ダイグロシア」(mediale Diglossie) (Sieber und Sitta 1987: 391) と呼ばれることがある。Clyne (1995: 43) はSieber und Sittaを支持して、「発話モード」(speaking mode) と「読解モード」(reading mode) に分けて、前者が自発性、親密さ、交流、後者が権威、距離、形式性を表現すると考えた。これに対してRash (1998: 48) は、2変種にそれぞれの機能が割り振られている「機能別ダイグロシア」(functional diglossia) の方が適当であると主張している。また、日常会話では一般にL変種が無標として使用されるが、相手がL変種を理解できない場合にはH変種にコードスイッチされる。しかし、媒体手段による使い分けは実際はもっと複雑で、「話しことば体と書きことば体」(Oralität und Literalität)、「書記と口頭」(Schreiben und Sprechen) の2つのレベルが交錯して使用変種が選択されるという状況がある。つまりドイツ語圏内でスイス人同士が会話する際にはL変種が使われるが、外国人との会話ではH変種を使用し、通常書きことばとして使用されるH変種を会話で使用するため文章体になってしまうということである。例えば、Scharloth (2004: 4) によると、Eメールでは58%、SMSにおいては75%ものスイス人がL変種を使っているように、話しことば体が書記にも使用されるのだ。Schlobinski / Watanabe (2006: 414) が日独対照研究を通じて、SMSでの媒体手段は書記であるが内容は口語的である

表1：義務教育課程の会話で用いる言語 (1990-2000) (Werlen 2004:9)⁶⁾

	1990	2000
標準ドイツ語	13.0	7.5
スイスドイツ語	33.2	39.0
両方	52.3	52.7

表2：職場の会話で用いる言語 (1990-2000) (Werlen 2004:15)

	1990	2000
標準ドイツ語	9.4	7.5
スイスドイツ語	57.6	51.8
両方	28.2	38.4

ことを指摘しており、スイスの状況も日本やドイツと同様の傾向が見られるようだ。標準ドイツ語と方言の使用頻度はどうなっているのだろうか。Werlen (2004) は国勢調査の統計を基に、1990年と2000年における「標準ドイツ語」(Hochdeutsch) と「スイスドイツ語」(Schweizerdeutsch) (=方言) の使用頻度を紹介している。学校での会話で使用される言語は、1990年から2000年の間にスイスドイツ語の使用率が上昇し、標準ドイツ語の使用率は低下しているが、両方を併用する率が最も高くなっている (表1)。職場においては、スイスドイツ語の使用率が低下しているが、両方を併用する率が上昇している (表2)。学校と職場における言語使用で共通する点は、標準ドイツ語だけを使用すると回答したスイス人は1割に満たないところにある。このような言語状況は書記と口頭で変種を使い分ける媒体手段ダイグロシアの概念にそぐわないとの理由で、Werlen (2004: 24) は「非対称バイリンガリズム」(asymmetrischer Bilingualismus) と呼んでいる。

以上のように、Fergusonによるダイグロシア理論が発表されてから、時間の経過と共にスイスの言語状況に変化が見られたことも反映して、さまざまな修正案が出されているが、ドイツやオーストリアと比較するとスイスの言語状況の特殊性に変わりはなく、さらなる実証研究によるダイグロシア理論の精緻化が求められよう。

3. スイス標準変種の規範化

前節でダイグロシアについて概観したが、憲法で規定されているドイツ語はH変種たる標準ドイツ語であり、日常会話で用いられているL変種たる各地域の方言とは考えられない。現代ドイツ語の成文規範化は19世紀末頃からドイツを中心に行われ、端緒を開いた正書法の

Konrad Dudenや正音法のTheodor Siebsの影響はドイツ語圏全域に波及した。ドイツ語全般の規範化にスイスが積極的に関与することはこれまで一度もなく、ドイツでの規範作成に協力しつつ受け入れるという消極的姿勢を取ってきた。スイス変種の辞典としては、最近までドイツのDuden編集部から出版された*Schweizer Schülerduden*と*Unser Wortschatz*があるのみだった。

1898年に初版が刊行されたSiebsらによる発音辞典は、演劇舞台での発音を規範化することが目的で、ベルリンを中心に北部ドイツの発音をモデルに作成された。このSiebs規範は、当初の目的を遥かに超える形で普及し、放送局や学校教育でも使用されるに至った。舞台発音として出発したSiebs規範は、こういった需要に答えるべく改訂を重ね、一般的なドイツ語標準発音として発展する運命を担った。この発音規範はスイスにも影響を及ぼしたが、スイス人Bruno BoeschはSiebs規範の受容を「国家への背信行為」と看做して、1957年に『スイスにおける標準ドイツ語発音への手引き』（*Die Aussprache des Hochdeutsch in der Schweiz. Eine Wegleitung*）を上梓した。1969年の第19版では、標準発音を理想的な発音形式「純粹標準発音」（*reine Hochlautung*）と現実の発話に近い「緩和標準発音」（*gemäßigte Hochlautung*）に分けられ、緩和標準発音では初めて地域の特徴をも考慮し、スイスやオーストリアなどの発音形式もここで記述された。スイス変種に関してはBoeschによる『手引き』を参考に記述されている。Siebs規範はその後改訂されることはなく、第19版が最後になった。その後は、Duden編集部の『発音辞典』（*Aussprachewörterbuch*）がドイツ語の中心的な発音辞典として今日に至っているが、国や地域の特徴は全く考慮されていない。同じDuden編集部による『ドイツ語正書法』（*Die deutsche Rechtschreibung*）（以下、*Rechtschreibduden*）と*Duden Universalwörterbuch*が国や地域の情報を見出し語に付記しているのと対照的である。

スイス変種の言語学的特徴の記述とそれに基づく辞典としては、Kurt Meyerによる『スイスではどう言うか？』（*Wie sagt man in der Schweiz?*）（1989）が挙げられる。本書はドイツ語圏全体の共通部分と異なるスイス独特の発音や正書法、文法、語彙を記述することを目的としている。Meyerはスイス・ドゥーデン委員会委員長を務めた経験があり（Ammon 1995: 360）、*Rechtschreibduden*におけるスイス変種記述にも関与している。2006年には改訂版『スイス辞典：スイスではこう言う』（*Schweizer Wörterbuch: So sagen wir in der Schweiz*）が出版された。改訂版のタイトルではスイス独自の辞典であることが強調されているが、オーストリアの『オーストリア辞典』（*Österreichisches Wörterbuch*）を意識した変更ではないかと思われる。標準変種を記述しているMeyerの（1989）と（2006）に共通する点は、*sagen*をタイトルに用いている点である。*sagen*は多様な意味を持つが、第一義は「（語や文などを）調音する、発声する」（*（Wörter, Sätze o. Ä.） artikulieren, aussprechen*）（*Duden Universalwörterbuch* 2003）であり、Meyerが標準変種を話しことばで用いることを視野に入れて編纂していることがわかる。スイスでは、標準変種は主に書きことばとして用いられ、話しことばでは限られた

場面で用いられることを考えるならば、ドイツやオーストリアの変種と対等の関係でのスイス標準変種を記述する視点にMeyerが立っていると考えられる。改訂版を刊行する主たる目的は、1989年版が絶版になっていることから、本書を入手可能な形にすること (Meyer 2006: 13) であり、内容的に大きな修正は行われていない。注目すべき変更点は出版社がドイツに本拠地があるドゥーデン出版 (Mannheim) からスイスのフーバー社 (Frauenfeld) に変わった点である。Ammon (1995: 77) によると、編纂時に依拠する模範となる文章や発音が当該の標準変種の使用国内であれば「内部規範性」(Endonormativität) を満たしていることになり、その場合の規範典は「内部規範典」(Binnenkodex) と呼ばれる。国外の変種を模範として編纂、出版された言語規範典は「外部規範典」(Außenkodex) と呼ばれ、その言語中心地は「外部規範性」(Exonormativität) を持つと説明される。Meyer (2006) は、スイスで出版することにより、内部規範性をより明確に内外に示すことができたと考えられる。さらに、ドイツ語の複数中心地性 (Plurizentrität) に関わる研究を反映して、1989年版で用いられていた „Binnendeutsch“ は2006年版では削除されている。この語義は「内部ドイツ語」であり、ドイツ国内のドイツ語を指し示すが、Hugo Moser (1962: 5) が、ドイツ帝国時代の「帝国ドイツ語」(Reichsdeutsch) を置き換えて称したものである。この術語はドイツ語の単一中心性を前提としており、ドイツのドイツ語が標準であるとの含意があるものの、オーストリアやスイスなど他のドイツ語圏でも用いられることがあった。2006年版では、これに代わって新たにドイツの変種を指す „deutschländisch“ が導入され、ドイツ語が複数の対等の標準変種を持つ言語であるという複数中心地性が前面に出されている。

2004年に刊行された『ドイツ語変異形辞典』(*Variantenwörterbuch des Deutschen*) (以下、変異形辞典) は、副題「オーストリア、スイス、ドイツ並びにリヒテンシュタイン、ルクセンブルク、東ベルギー、南チロルにおける標準語」に表現されているように、ドイツ語の複数中心地性を理論的根拠に記述したものである。本辞典はUlrich Ammon (デュースブルク・エッセン大学、ドイツ) の構想に基づき、Ammonを代表に、Hans Moser、Jakob Ebner (以上インスブルック大学、オーストリア)、Hans Bickel、Heinrich Löffler (以上バーゼル大学、スイス) らを中心とする国際チームにより編纂された。本辞典は、標準ドイツ語を包括的に記述することを目的としておらず、国や地域の特徴を持ち標準変種に含まれる語彙並びに語法が記述されている。従って、見出し語数は約12000語で、約13万語を収録するRechtschreibdudenの1割以下になっている。標準ドイツ語は複数の標準変種により構成される複合体であるが、標準変種間の相違は限られているので、見出し語数は必然的に少なくなる。ただ、変異形辞典のページ数は954ページで、1216ページのRechtschreibdudenより2割ほど少ないだけで、個々の語に関する記述が極めて詳細である。これまでドイツ語の多様性を反映してきた辞典 (Rechtschreibdudenや*Universalwörterbuch*、Siebs第19版など) では、使用地域が限られている語にはösterr. (オーストリア) やschweiz. (スイス) などの補足説明が付されているが、

ドイツだけで使用される語には補足説明が何も付けられていない。これはBinnendeutschを無標とすることを前提にしていたので、ドイツ、あるいはドイツ国内のある地域で標準変種として通用する語は、ドイツ語圏全域の標準形であることを暗黙の前提としていたからである。

例えば、「高校修了資格試験」を表す語をRechtschreibduden（2006）で見ると、ドイツの„Abitur, das; -s, -e *Plur. selten* <lat.> (Reifeprüfung)“は無標であるが、スイスやオーストリアで使用される語„Matur, die; - <lat.> (*schweiz. für* Reifeprüfung)“と„Matura, die; - (*österr. u. schweiz. für* Reifeprüfung)“には国名が付されている。Rechtschreibdudenの編纂にはオーストリアとスイスのドゥーデン委員会も関与し、本辞典が両国でも幅広く流通しているにもかかわらず、ドイツ語の単一中心地的理念が背景にあることがわかる。変異形辞典では、„Abitur D“のようにドイツだけで使われている変種であることが明示され、さらに„Matura A CH, … Matur CH“のように、それぞれ「A（オーストリア）、CH（スイス）」が記されて変種間の平等性が表現されている。

スイスの語法は既にDudenでも見出し語に記載があったが、単にスイスで使用されるという説明に過ぎず、その位置づけが標準変種であるかについては曖昧なままであった。複数中心地的言語観により、初めてスイス語法をスイス標準変種であると承認したのが変異形辞典である。また、Meyer（2006）には、複数中心地言語としてのドイツ語とスイス国家標準変種に関するHans Bickel（変異形辞典の編者の一人）の論考（pp.15-17）が収録されていることから、複数中心地的言語観による路線を採用したことが明確に謳われている。このようにスイス標準変種の記述は大きく進展したが、この新たな展開がドイツの学者の主導⁷⁾により行われたところに、スイス標準変種の特異な事情がうかがえる。

4. 言語変種に対する態度

複数中心地的言語観は標準変種の規範化に大きな影響を与えてきたが、記述の対象となっているのはダイグロシア状況でも標準変種の方だけである。しかし、実際にスイス人同士が会話で使用するのは方言（L変種）であり、H変種が話しことばで使われるのは外国人と話す時や限られた公式場面だけである。方言は社会階層や場面に関わりなく、一般に話しことばとして使用されるコードであるところにダイグロシアの特徴がある。H変種にはマスメディアを通じて接することはできるが、正式に学ぶのは学校に入ってからである。このような標準ドイツ語に対してスイス人は「自信なさ、拒絶、愛情が伴わない尊敬の念」（Sitta 1979: 166）といった否定的な態度を抱いている。Häcki Buhofer / Studer（1993: 184）がチューリヒの小学1年生、2年生を対象に行った調査では、1年生の段階で多様な変種の区別が可能になり、2年生になると変種間の距離も判断できることがわかった。標準変種については、1年次には肯定的な態度を持っているのに、2年次には否定的になることが確認されたが、この変化は自ら学んだの

か、他者から植え付けられたのかについては不明である (ibid.: 197)。Häcki Buhofer / Studer はこの結果を見て、標準変種への肯定的な態度を育む必要があると考えている。

標準ドイツ語に対する距離感については、Hägi / Scharloth (2005: 8) がチューリヒで質問紙による調査を行っている (表3)。それによると、79.1%もの回答者が、標準ドイツ語はスイス人にとって外国語であると答えている。しかし、「あなたにとって標準ドイツ語は外国語ですか」との問いに首肯した回答者はわずか30.2%に過ぎない。つまり約半数が、スイス人全般にとっては外国語だが、自分にとっては外国語ではないと回答したことになる。Hägi / Scharloth (ibid.: 9) はこの結果から、標準ドイツ語は外国語だからスイス人はうまく習得できないというステレオタイプが、個人レベルでの自己認識にはさほど影響を与えていないと結論づけている。このように、公用語であるドイツ語のことを、最初に学ぶ外国語であるとまで言うスイス人がいることから⁹⁾、意識レベルでの標準ドイツ語への距離感がわかる。しかしながら、スイス人が読み書きでは標準ドイツ語を日常的に使用し、マスメディアではニュース番組等で標準ドイツ語が話されている現状を考えるならば、標準ドイツ語を外国語と称するのは実態にそぐわない。むしろ方言がスイス人のアイデンティティと強く結びついていることから、2番目に習得した言語変種である標準ドイツ語のことを外国語と称してスイス国民としての自立性を表現しようとしているものと考えられる。そうすると表3の結果は、「スイス人にとって」では理念を意識した回答、「自分にとって」では現実を見つめた回答であるため結果に大きな違いが生じたものと解釈されよう。そこでは標準ドイツ語のモデルがドイツにあるとする単一中心地的言語観も影響しているだろう。このような状況から、スイス人のドイツ語への意識は、ダイグロシアが存在しないオーストリアやドイツ人のドイツ語への意識と異なることが推論されるが、スイス人の標準変種に対する態度はどうなっているのだろうか。

Gutzwiller (1991) による新兵を対象とする包括的な態度研究で、スイス内の各国語話者に対する好感度の調査結果は興味深い (表4)。回答者が最も好感を持っているのはフランス語圏スイス人と南部スイス人で、これにフランス人が続いている。オーストリア人とイタリア人に対しては、ほぼ同様の好感度を示している。最も好感度が低いのがドイツ人で、55.9%¹⁰⁾もの回答者がドイツ人に対しては好感が持てないと答えている。なお、ドイツ人に好感が持て

表3：標準語の外国語特性 (Hägi / Scharloth 2005: 8)

		標準ドイツ語 ⁸⁾ は私にとって外国語である。		計
		否定	肯定	
標準ドイツ語はスイス人にとって外国語である。	否定	90.0% 18	10.0% 2	20.9% 20
	肯定	64.5% 49	35.5% 27	79.1% 76
計		69.8% 67	30.2% 29	100.0% 96

表4：どれほど好感を持っていますか。（有効回答%）（Gutzwiller 1991: 149-150）

	好感が持てる	どちらかと言うと好感が持てる	好感が持てない	どちらかと言うと好感が持てない	わからない
仏語圏スイス人	44.6	35.3	10.1	2.3	7.7
南部スイス人	39.3	38.8	11.6	2.7	7.6
レトロマン人	31.7	25.8	6.3	2.3	33.9
ドイツ人	13.2	25.8	35.5	20.4	5.1
オーストリア人	24.8	39.9	17.1	8.6	9.6
フランス人	39.2	36.8	11.1	3.2	9.7
イタリア人	30.6	32.7	18.7	9.0	9.0

ない回答者とオーストリア人に好感が持てない回答者の間には有意の相関関係がある（ibid.: 148）。

スイス人が標準ドイツ語を話すと、音声学的にスイスドイツ語の特徴が混在するが、このことがスイス人にどのような影響を与えるのだろうか。スイスドイツ語の発音で標準ドイツ語を話して笑われたことがあるかとの問いに、笑われたことがあると答えた回答者が40.8%もいる（表5）。ところが標準ドイツ語の会話力を重要と考える回答者はおよそ9割に上る（表6）。この結果から、ドイツ人のドイツ語が中心と考え、そこから逸脱したスイス標準ドイツ語での会話には消極的である一方で、標準ドイツ語の口頭での運用力の重要性は認識しているという両面価値的な意識がわかる。

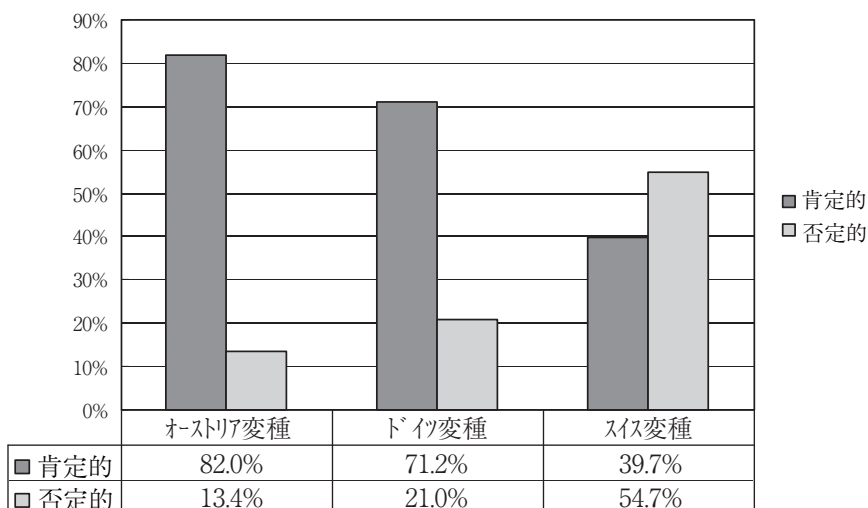
Takahashi（1996）では、オーストリア、スイス、ドイツの標準変種に対するスイス人の態度を調査結果を示している（グラフ）。オーストリア変種に対しては約8割、ドイツ変種に対しては約7割の回答者が好意的な態度を示しているが、スイス変種はわずか4割が好意を持っているに過ぎない。逆に否定的な態度はオーストリア変種とドイツ変種に対してそれぞれ13.4

表5：スイスドイツ語の発音で標準ドイツ語を話して笑われたことがありますか。（有効回答%）（Gutzwiller 1991: 155）

はい	いいえ
40.8	59.2

表6：方言と並んで標準ドイツ語も話し、理解できることが重要だと思いますか。（有効回答%）（Gutzwiller 1991: 118）

とても重要	重要	重要でない
49.0	41.9	9.1



グラフ：オーストリア変種、ドイツ変種、スイス変種に対するスイス人の態度 (Takahashi 1996) を基に作成

%と21%と少ないが、スイス変種に対しては54.7%と最も多くなっている。GutzwillerとTakahashiの調査結果を比較すると、それぞれ人と言語変種に対するスイス人の態度であるが共通する傾向が見られ、オーストリア人・オーストリア変種よりもドイツ人・ドイツ変種の方をより否定的に見ているようだ。ただし、ドイツ変種に対しては、肯定的態度が否定的態度を大きく上回っており、ドイツ人は好きではないが、ドイツ変種は肯定的に捉えていることがわかる。注目すべき点は、スイス人が最も否定的に見ている標準変種はスイス変種であるところである。過半数のスイス人がスイス変種を否定的に見ており、スイス標準変種を話すことが億劫になるという意識が理解できる。第2言語に対する肯定的な態度を持つ学習者は、否定的な態度を有する者よりも高い能力を獲得し、逆に第2言語の学習過程の結果として、能力が高ければ高いほど肯定的な態度を持つ (Lasagabaster 2004: 400)。スイス標準変種がスイス人にとって第2言語であるかについては議論の余地があるが、スイス標準変種への否定的態度が習得 (特に口頭表現能力) にマイナスの影響を及ぼし、方言の使用拡大を助長する可能性は否定できないだろう。

5. ドイツ語標準変種の多層性とダイグロシアの変遷

古典的ダイグロシアの例としてしばしば挙げられるスイスドイツ語圏では、日常会話でスイス人同士が標準ドイツ語を話すことはなく、Ahokas (2003: 47) が指摘するように、教室内で不自然な形で教師と会話する程度であり、標準ドイツ語の十分な運用力を習得するのは容易で

はない。しかし、学校では高等教育に近づくにつれて標準ドイツ語での口頭運用力が求められ、また外国人やドイツ語圏外のスイス人とドイツ語で会話するには標準ドイツ語を使用しなければならないという状況がある。態度研究からもわかるように、スイス人は標準ドイツ語で会話することを余り好まず、特にドイツ人が相手の場合にはドイツ語での会話に劣等感すら感じることもあるようだ。このように標準ドイツ語での会話がうまくできないという状況は、ダイグロシアではやむをえない部分もあるが、社会環境の変化が言語状況に新たな影響を及ぼしていることを考慮しなければならない。

ドイツ語の複数中心地性に関する研究によって、標準ドイツ語は複数の標準変種の集合体であり、それぞれの変種は対等の関係にあるという考え方が普及してきたことは重要だ。スイス標準変種には、基層方言の影響を受けて文法や発音、語彙の各レベルでドイツの変種から逸脱する言語形式がある。こうしたスイス変種もドイツ変種と対等の地位を有し、優劣関係にあるのではないという認識が芽生えてきた。変異形辞典の刊行はこの認識を強化することになるだろう。複数中心地的言語観により標準変種の平等性が唱えられ、規範典の充実が促されたが、このことは同時に地域・国家のアイデンティティを尊重することでもあり、方言の使用拡大にも間接的な影響を与えるのではないかと推測される。

Ammon (1995: 80) のモデルに基づきスイス標準変種の現状を考察するとどうなるだろうか。規範典は拡充し、スイスの言語学者も編纂への関与や批評を行い、模範話者・著者もスイス人である。ただ、内部規範典はMeyer個人によるものに限られ、専門家集団による共同作業で編纂されているドイツやオーストリアの規範典に比べると公共的色彩が弱い。見出し語はスイス標準変種に限られているので4000語ほどに過ぎず、あくまでも基本となる外部規範典（事実上はDuden）を補完する機能を担うものだというのを忘れてはならない。そのDudenは十分とはいえないながらも、使用国や地域の情報も含んでいるので、Dudenの方がスイスにおいても汎用性が高いと言える。規範権威者がどのように行動しているかについては、さらなる調査が必要であるが、Meyer (2006) に公的規範性は付与されておらず外部規範典への依存は続いている。また、スイスドイツ語の話者多数がこの言語規範を支持するかについても検証が必要だ。方言に自らのアイデンティティを見出ししているスイス人にとって、標準変種の確立は二次的な課題であると考えられる。複数中心地的言語観は、欧州連合の多言語・多文化主義にも呼応して、主にドイツやオーストリアの言語学者の主導で普及してきた。この影響と、学校教育における標準変種使用拡充への要請が、標準変種確立に消極的だったスイス人の意識にわずかながらも変化を生じさせたというのが現状である。

ダイグロシア状況下のスイスでは、ドイツ語を母語としない移民の子供たちにとって、第2言語として標準ドイツ語を習得するのは容易ではない。総人口の約20%を外国人が占めるスイスでは、学校教育で欠かせない標準ドイツ語の教育が重要なテーマになっている。Gyger (2004) によると、OECDが実施した第1回学習到達度調査（PISA）の結果を受けて、州教育

局長会議 (EDK, Konferenz der kantonalen Erziehungsdirektoren) の支援の下、幼稚園と小学校における言語教育で標準ドイツ語を重視する方向性が打ち出された。Gyger は、幼稚園での授業言語を標準ドイツ語に変えることは、最大かつ緊急の課題であると指摘している。しかし、幼稚園の日常会話 (特に感情表現など) をスイス標準変種で行うには、話しことばのレジスターを新たに開発しなければならない (ibid.: 130) という大きな課題を抱えている。また、移民の子供の教育では、一貫した標準ドイツ語による教育の必要性が説かれているが、スイス人の子供たちにまでこの方針がすぐに浸透するかは疑問だ。従来の教育によっても、スイス人の子供たちがドイツ人と比較して学業で劣るということはなかったからである。このように、標準ドイツ語を日常会話で用いたいという積極的な意識が欠如しているからこそダイグロシアが存続するのだと言えよう。

スイス標準変種の記述が量的にも質的に拡大するにつれて、これまでは標準ドイツ語からの逸脱と考えられてきた言語形式を、標準語の一部と認めようという気運が生まれた。それにより以前は専門家を中心に議論されていたスイス標準変種が一般の人々にも周知されつつある。この流れは、単一中心地的言語観から複数中心地的言語観への転換を促すものではあるが、スイス人の意識の中にあるドイツ標準変種の優位性を払拭するには至っていない。スイス人ばかりでなく、Hofer (2006: 131 f.) によると、スイス在住のドイツ語学習者も、一般にドイツ語を単一中心地言語と看做している。ドイツは、経済力、人口ともにスイスの10倍以上の規模を持つばかりでなく、スイスと違って実際に標準ドイツ語が日常会話でも使われていることから、ドイツ変種が覇権的影響力を持ち続けているというのが実情だろう。理念上は確かに多様な変種が承認されつつあるが、これまで続いたドイツ変種の優位性が簡単に揺らぐわけではない。そんな中で、規範作成者はスイス標準変種の独自性を確立すべく、方言と標準語の境界線上に位置する語彙までも記述の対象にすることがある。例えば、Läubli (2006: 125) は、„Tätschmeister“や„Butz“、„Päcklisuppe“などの語が変異形辞典に収録されているが、これらは本来なら方言に分類されるべきであると指摘している。方言に区分されるはずの語を標準変異形に「格上げ」することで標準変種を拡大する手法については、オーストリアでも行われたように、さらなる言語学的研究によりその妥当性を検証しなければならないだろう。

他方、方言の使用域が拡大される傾向も見られ、全体としてはスイスの言語状況の独自性が強まりつつある。だが、上記のように方言から標準変種への若干の転移 (Transferenz) が見られるものの、その間に連続体が生じるほどではなく2変種の距離は十分保たれていて、ダイグロシアが解体する兆候は今のところ見られない。従来は標準変種が使用されていた領域で、方言が使用されるケースも増えていることから、ダイグロシアの特徴である2変種の使い分けが緩やかになる傾向は見られる。同時に、複数中心地的言語観の影響の下で、スイス標準変種の記述が以前より精力的に行われることで、各国の標準変種の承認並びに尊重といった認識が芽生えることが予想される。スイス標準変種が独自の地位を得てスイス人にもその理念が共有

されるならば、スイス人のアイデンティティーが表現されることにもなる。また、スイス人に合った標準変種が確立できれば、学校教育においても積極的に取り入れやすくなるだろう。このような標準変種の変容と方言の使用領域拡大という言語状況にあって、スイスにおけるダイグロシアは新たな転換期を迎えている。カルヴェ（2002: 68）は、Fergusonの論文発表後まもなく、ギリシアでL変種が公用語になったことを例に挙げ、ダイグロシアは際限なく変化していくものであると考えた¹¹⁾。現在のスイスには、スイスの方言（L変種）を造成言語（Ausbausprache）にしてドイツ語と決別しようとするほどの独立志向は見られず、標準変種を拡充してドイツ語の一変種としての地位を確立するという現実的な路線をとっている。ダイグロシアは将来200年にわたって安定するだろうというFerguson（1996: 37）の予測がどうなるかは、後世の研究者により検証されるであろう。

注

- 1) 以下、「スイス」は「ドイツ語圏スイス」を表すこととする。
- 2) 「言語共同体」と訳されることも多いが、“speech community”は主に話しことばの記号体系ならびに文化的価値観をも共有する共同体を意味するので、「言語」だけでなく「変種」も含意する「ことば」を採用した。
- 3) 初出は*Word* (Vol. 15) (1959, pp.325-340) である。
- 4) 最初に“diglossia”を使用した学者はFergusonではなく、Karl Krumbacher (*Das Problem der modernen griechischen Schriftsprache*, 1902) であることを、Britto (1986: 5) がDimitri Sotiropoulosの研究 (“Diglossia and the national language question in modern Greece.” *Linguistics* 197 (1977: 5-31.) に依拠しながら指摘している。
- 5) このような同一言語内の2変種の距離をBritto (1986: 33) は「最適領域」(optimal region) と呼んでいる。
- 6) Werlen (2004) はスイスの国勢調査結果を基に表を作成している。
- 7) 変異形辞典編纂の着想と編集責任者はUlrich Ammonである。
- 8) „Hochdeutsch“が用いられている。
- 9) ベルンではチューリヒよりも方言に固執する意識が強いというE. Werlen (1993: 105: „Dialekt als Norm. Hochdeutsch als Abweichung.“ Hrsg. P. Klotz und P. Sieber. *Vielerlei Deutsch*. 94-109) を引用しながら、Hägi / Scharloth (2005.: 29) は、ドイツ語圏内の全ての州が同じ状況であるとは限らないことを留保している。
- 10) 「好感が持てない」と「どちらかと言うと好感が持てない」の回答率の和。
- 11) カルヴェ（2002: 68）は、フランス語等のロマンス語諸語とラテン語の関係にも触れながら、L変種が将来のH変種となり得ることを歴史が証明していると述べている。

引用文献

- カルヴェ、ルイ＝ジャン (萩尾生訳) (2002) 『社会言語学』 白水社.
- Ammon, Ulrich (1995). *Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Das Problem der nationalen Varietäten*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Ahokas, Carmela (2003). *Die Förderung der deutschen Sprache durch die Schweiz*. Frankfurt a. M.: Europäischer Verlag der Wissenschaften.
- Britto, Francis (1986). *Diglossia - A Study of the Theory with Application to Tamil*. Georgetown University Press.
- Ferguson, Charles A. (1996). "Diglossia." In: Thom Huebner (ed.). *Sociolinguistic Perspectives — Papers on Language in Society, 1959-1994*. Oxford University Press, 25-39.
- Fishman, Joshua (1972). *Sociolinguistics*. Newbury House.
- Gutzwiller, Jürg (1991). „Identität versus Kommunikation. Junge Deutschschweizer zwischen Dialekt und Standardsprache.“ In: R. Schläpfer, J. Gutzwiller und B. Schmid (Hrsg.). *Das Spannungsfeld zwischen Mundart und Standardsprache in der deutschen Schweiz*. Sauerländer: Aarau/ Frankfurt a. M., 47-214.
- Gyger, Mathilde (2004). „Standardsprache im Kindergarten — eine neue sprachdidaktische Herausforderung.“ *Bulletin suisse de linguistique appliquée* No 79, 124-147.
- Gyger, Mathilde (2005). *Projekt Standardsprache im Kindergarten (PSS) - Zusammenfassung für Lehrpersonen*. Rektorat Kindergärten Basel, Arbeitsgruppe Integration.
- Häcki Buhofer, Annelies, Thomas Studer (1993). „Zur Entwicklung von Sprachdifferenzbewusstsein und Einstellungen zu den Varianten des Deutschen in der Deutschen Schweiz.“ In: Iwar Werlen (Hrsg.). *Schweizer Soziolinguistik*. (= Bulletin CILA 58). Neuchâtel, 179 - 199.
- Hägi, Sara und Joachim Scharloth (2005). „Ist Standarddeutsch für Deutschschweizer eine Fremdsprache? Untersuchungen zu einem Topos des sprachreflexiven Diskurses.“ *Linguistik online* 24, 1-35.
- Hofer, Lorenz (2006). „Normen und nationale Varianten beim Erwerb der Standardsprache in der diglossischen Schweiz.“ In: Eva Neuland (Hrsg.). *Variation im heutigen Deutsch. Perspektiven für den Sprachunterricht*. Frankfurt a. M.: Peter Lang, 123-134.
- Hugo Moser (1962). *Sprachliche Folgen der politischen Teilung Deutschlands*. Düsseldorf: Schwann, 1962.
- Lasagabaster, David (2004). „Attitude.“ In: *Sociolinguistics - International Handbook of the Science of Language and Society*. U. Ammon, N. Dittmar, K. J. Mattheier and P. Trudgill (Eds.). Berlin: Walter de Gruyter, 399-405.
- Läubli, Martina (2006). „Nationale Varietäten: eine Herausforderung für die Lexikographie.“ In: Christa Dürscheid und Martin Businger (Hrsg.). *Schweizer Standarddeutsch*. Tübingen: Gunter Narr, 113-130.
- Meyer, Kurt (1989). *Wie sagt man in der Schweiz?: Wörterbuch der schweizerischen Besonderheiten*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Meyer, Kurt (2006). *Schweizer Wörterbuch – So sagen wir in der Schweiz*. Frauenfeld: Huber.
- Roche, Jürgen (2006). „Natürliche Mehrsprachigkeit als Mittel der Integration.“ In: Eva Neuland (Hrsg.). *Variation im heutigen Deutsch: Perspektiven für den Sprachunterricht*. Frankfurt a. M.:

Peter Lang, 79-92.

Scharloth, Joachim (2004). „Zwischen Fremdsprache und nationaler Varietät — Untersuchungen zum Plurizentritätsbewusstsein der Deutschschweizer.“ *Internet-Zeitschrift für Kulturwissenschaften* 15, 1-26.

Schlobinski, Peter und Manabu Watanabe (2006). „Mündlichkeit und Schriftlichkeit in der SMS-Kommunikation. Deutsch - Japanisch kontrastiv.“ In: Eva Neuland (Hrsg.). *Variation im heutigen Deutsch: Perspektiven für den Sprachunterricht*. Frankfurt a. M.: Peter Lang, 403-416.

Sieber, Peter und Horst Sitta (1987). „Deutsch in der Schweiz.“ *Zeitschrift für Germanistik* VIII, 389-401.

Sitta, Horst (1979). „Spracherwerbtheoretische Aspekte des Verhältnisses von Mundart und Hochsprache in der Schule.“ In: Hrsg. Heinrich Löffler, Karl Pestalozzi und Martin Stern. *Standard und Dialekt: Studien zur gesprochenen und geschriebenen Gegenwartssprache*. Bern/München: Francke, 165-175.

Sonderegger, Stefan (2003). „Aspekt einer Sprachgeschichte der deutschen Schweiz.“ In: Werner Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann und Stefan Sonderegger (Hrsg.). *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*. Bd. 2.3, Berlin: Walter de Gruyter, 2825-2888.

Takahashi, Hideaki (1996). *Die richtige Aussprache des Deutschen in Deutschland, Österreich und der Schweiz - nach Maßgabe der kodifizierten Normen*. Frankfurt a. M.: Peter Lang.

Werlen, Iwar (2004). „Zur Sprachsituation der Schweiz mit besonderer Berücksichtigung der Diglossie in der Deutschschweiz.“ In: *Bulletin suisse de linguistique appliquée*, No 79, 1-30.